

症 例 報 告

外傷による頬脂肪体のヘルニア形成を きたした1例

小 川 光 一 松 本 断 佐々木 正 道
関 山 三 郎

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座* (主任：関山三郎教授)

〔受付：1979年10月11日〕

抄録：今回われわれは、頬脂肪体の口腔内への herniation を伴った右側頬粘膜部裂創の1例を経験したので報告する。

症例は1歳2カ月の男児で、昭和54年1月15日午後7時歯ブラシをくわえて転倒し、歯ブラシの先端が右側頬部に突き刺さり、口腔内に赤色を帯びた腫瘤が露出し、同日午後8時急患として当科を受診した。現症は右側頬部にびまん性腫脹が認められ、腫瘤を咬むために閉口障害が見られた。口腔内所見は、右側耳下腺乳頭部の遠心下部より拇指頭大棍棒状の形の、有茎性、表面は赤褐色・平滑・桑実状を呈し、弾性軟の軟組織の腫瘤を認めた。基部に一致して裂創が存在し、 $\frac{D}{D}$ に一致した圧痕が腫瘤に見られた。現病歴および現症より外傷による頬脂肪体の herniation と診断し、ただちに全身麻酔下に頬脂肪体の組織隙復位・裂創縫合術を実施した。術後経過は良好であった。

緒 言

口腔領域とくに口腔内における小児の外傷は物をくわえての転倒や衝突などにより受傷する事が多い^{1,2)}。出血は少量であるが裂創を伴った場合には縫合が必要となる。受傷の方向によっては、口蓋の弁状裂創、穿孔、頬粘膜への刺創となるが、稀に頬脂肪体の露出をきたした報告がある^{3,4)}。

今回われわれは、歯ブラシをくわえて転倒し、頬脂肪体の口腔内への herniation を伴った右側頬粘膜部裂創の1例を経験したので、文献的考察を加え、その概要を報告する。

症 例

患者：1歳2カ月、男児。

初診：昭和54年1月15日。

主訴：右側頬粘膜部の腫瘤が気になる。

家族歴および既往歴：特記事項なし。

現病歴：昭和54年1月15日7時頃、家の中で歯ブラシを咬んだり口の中に入れて遊んでいたが、2～3歩あるいた所でゴザの端につまづき転倒し、歯ブラシの先端が右側頬部に突き刺さったが、すぐ抜け落ちた。出血は少量で止まったが、口腔内に赤い肉のような物が見え、それを咬むため口が閉じられないようであった。同

Traumatic herniation of the buccal fat pad into the mouth : report of a case

Koichi OGAWA, Dan MATSUMOTO, Masamichi SASAKI and Saburo SEKIYAMA

(Department of Oral Surgery II, Iwate Medical University School of Dentistry, Morioka 020)

*岩手県盛岡市中央通1丁目3-27 (〒020)

Dent. J. Iwate Med. Univ. 4 : 206-210 1979

日午後8時、急患として当科を受診し、入院した。

現症：全身所見：体格中等度，栄養状態良で，号泣し興奮気味であった。

口腔外所見：顔貌では右側頬部に軽度のびまん性腫脹が認められ，表面皮膚は正常で，熱感・圧痛は認められず，波動も触知されなかった。顎下リンパ節は両側とも大豆大・可動性で圧痛はなかった。また，口腔内の腫瘤を咬むためと思われる閉口障害が認められた。

口腔内所見：右側耳下腺乳頭部に近接しその遠心下部より，拇指頭大棍棒状の形態の，有茎性，表面は赤褐色・平滑・桑実状を呈する腫瘤を認めた（図1）。硬度は軟で可動性であった。腫瘤の基部に一致して頬粘膜部の裂創が存在し，新しい出血はほとんど見られず，裂創部に少量の残留血液と血餅が見られた。患側の歯は $\frac{D \sim A}{D \sim A}$ まで萌出しており， $\frac{D}{D}$ に一致した圧痕が腫瘤に見られた。

臨床検査所見：夜間急患で受診し時間外手術であったため，胸部レ線撮影以外は，術前の検査は実施されなかった。

臨床診断：頬脂肪体の herniation を伴った右側頬粘膜部裂創。

処置および経過：患児は興奮状態であったため口腔内の創の大きさ・深さ，異物の有無などの診査を試みたが，患児の協力を得ることは不可能であった。現病歴および現症より腫瘤が頬脂肪体と考えられたので，処置として早期の脂肪体の復位と裂創縫合が必要と考えられた。1月15日午後11時より緊急手術として，心電計のモニター下に全身麻酔により口腔内の精査・頬脂肪体の復位・裂創縫合術を実施した。

腫瘤の大きさは直径約1cm長さ約2.5cmの棍棒状の形をしており（図1），過酸化水素水にて裂創内に残留する血液と血餅を除去し，歯科用ゾンデにより探査すると，裂創部の後上方に頬脂肪体の存在したと思われる組織隙が触知され，組織隙部および創腔中に異物は認められなかった。創腔を消毒・洗浄し摂子にて腫瘤を組織隙に挿入すると，裂創周囲粘膜部がわずか

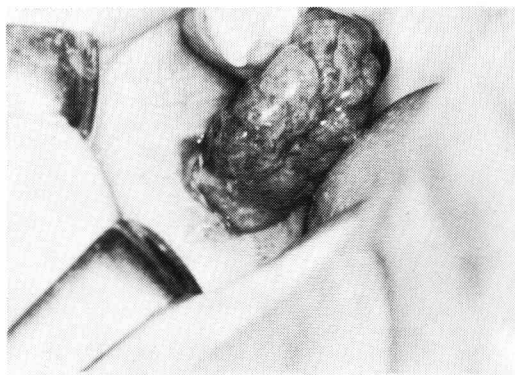


図1 頬粘膜の裂創より有茎性の突出を示す頬脂肪体



図2 組織隙に容易に復位された頬脂肪体

に膨隆をきたしたものの，容易に復位された（図2）。裂創部をデキソンの4-0で全層縫合し，処置を終了した。裂創部の長さは約2cmであった（図3）。

術後経過では翌日は38℃の発熱を生じ右側頬部の著明な腫脹をきたしたが，術後4日目より急速に縮少し平熱となった。術後9日目には右側頬粘膜部に拇指頭大の硬結を触知するのみとなり退院した。退院後5週間目にはデキソン糸は消失し硬結も創縁部に局限していた。術後8カ月の現在，良好に経過している（図4）。

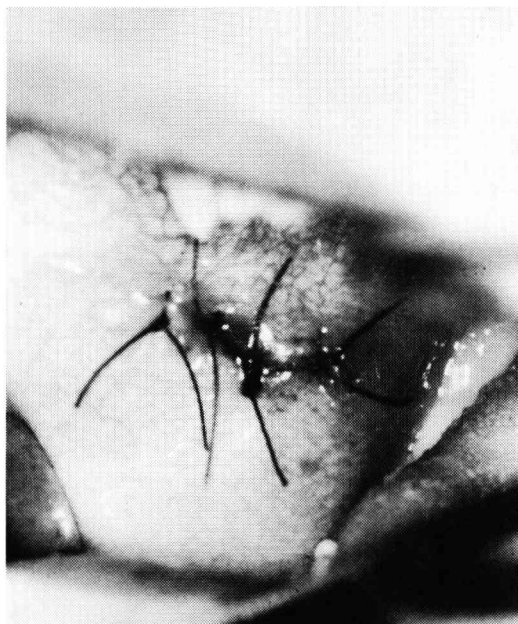


図3 デキソンによる創の縫合

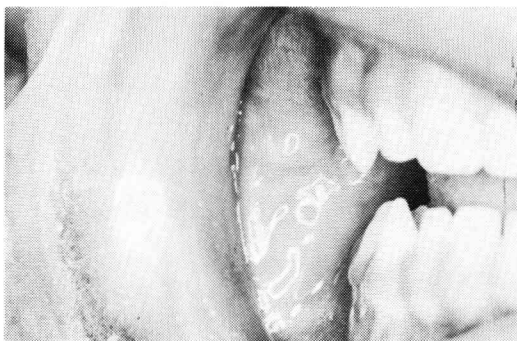


図4 頬粘膜は平坦で創は治癒

考 察

頬脂肪体が外傷により口腔内にヘルニアの形成をきたした報告は, Clawsonら(1968)³⁾によって Trauma-induced avulsion of the buccal fat pad into the mouth としてはじめてなされた。ついで Brookeら(1969)⁴⁾の Traumatic pseudolipoma of the buccal

mucosa, Browne(1970)⁶⁾の Herniation of buccal fat pad などとして, 6症例が報告されているにすぎない⁹⁾。本邦では, われわれが文献を渉猟した限りでは, 現在まで報告例はなく, わずかに口腔内の脂肪腫として最近報告された2症例が該当すると思われるのみであった。^{10), 11)}(表1)

本症の臨床的事項についてのこれまでの報告例からみると, 年齢は最少5カ月, 最高4歳で平均1歳10カ月であり, 性別では男5例, 女3例であった。発症部位は, 右側7例, 左側1例で右側に多い。受傷原因は乳幼児の外傷事故の最大原因である転倒5例, 転落2例などであった。受傷原因物としては, 玩具やほうきの柄, スプーンなど固い細長いものであるが, 本邦で

表1 外傷による頬脂肪体ヘルニア報告症例

No.	報告者	報告年代	年齢	性別	部位	受傷原因	受傷原因物	ヘルニア形成の状態	受傷より処置までの期間	処置 麻酔	病理 診	備考	
1	Clawson ³⁾	1968	2y	女	右	転倒	ほうきの柄	黄赤色	当日	全麻	復位	有	
2	BrookeとMacGregor ⁴⁾	1969	2y4m	男	右	転倒	椅子	緑黄色・有茎性 直径2.5cm	1日	全麻	切除	有	
3	Turner ⁵⁾	1969										学会発表のみ	
4	Browne ⁶⁾	1970	10m	男	右	転落	玩具の鹿の角	赤色・可動性・軟性・直 径2.5cm	当日	全麻	復位	無	
5	Cavina ⁷⁾	1972	5m	男	右	衝突	スプーン	有茎性 1.5×1cm	5日	全麻	切除	有	
6	MessengerとCloyd ⁸⁾	1977	4y	男	右	転落	スクーター	青味がかった平滑・無痛 性・2×1cm	当日	局麻	切除	有	
7	川原ら ¹⁰⁾	1978	1y6m	女	右	転倒	歯ブラシ	一部赤色で黄色苔 2.0× 1.2×0.7cm(棍棒状)	14日	全麻	摘出	有	脂肪腫と報告
8	三科ら ¹¹⁾	1979	2y6m	女	左	転倒	歯ブラシ	帯黄白色・有茎性・弾性 軟・拇指頭大		全麻	摘出	有	脂肪腫と報告
9	小川ら	1979	1y2m	男	右	転倒	歯ブラシ	赤褐色・有茎性・弾性軟 直径1cm・長さ2cm	当日	全麻	復位	無	

はいずれも歯ブラシであった。

ヘルニア形成の状態は、大きさでは最大径が約2cmほどで、色調は赤色から黄色であった。処置は、頬脂肪体の切除5例、組織隙への復位3例であり、受傷より処置までの期間は1日以内のものが5例であった。これらの処置については、全身麻酔下で行われたものは7例と多く、局所麻酔例は1例のみであり、このことは受傷年齢を考えると全身麻酔が不可欠であることを示している。

口腔内とくに頬粘膜部に発生した脂肪腫と、頬脂肪体との組織学的鑑別が、きわめて困難であることは、MacGregor (1966)¹²⁾、Panders (1967)¹³⁾をはじめ諸家が等しく指摘しているところである¹⁴⁾¹⁵⁾。

しかし、口腔領域の脂肪腫について、その発生年齢をみると、Greer and Richardson¹⁴⁾ (1973)の16例では、最低27歳から最高70歳で平均51歳であり、また Hatziotis (1971)¹⁶⁾の報告した145例のうち、頬粘膜部に発生した46例についてみると、最低12歳から最高77歳で平均52歳などでいずれも高齢者に多い¹²⁾¹³⁾¹⁷⁾。また経過期間は、2カ月から21年¹²⁾、6カ月から10年¹³⁾、3週から21年で平均約7年¹⁶⁾、14日から30年¹⁷⁾などであり、これからみても外傷の直後に生じる頬脂肪体のヘルニア形成とはあきら

かに異なるものであることが推測される。

先人の報告¹⁰⁾¹¹⁾では脂肪腫が頬粘膜にすでに存在し、外傷によりそれが口腔内に出現したとしているが、乳幼児および小児における口腔内の脂肪腫はきわめて稀であり、また先天性の起源をもつものである¹⁸⁾。先天性の脂肪腫では、出生時にあるいは生後1~3カ月の間に母親によって粘膜の着色や腫脹として、すでに気付かれたり、また、身体の発育につれて腫脹の増大をみている¹⁸⁾¹⁹⁾。

本症例は、母親の日常の観察によれば、頬部の腫脹や、頬粘膜部の淡黄色の着色もなく、顔貌は左右対称性であり、ごく普通の状態であった。また原因となった刺創に引き続き典型的な脂肪ヘルニアの症状を示したので、組織学的検索は実施しなかったが、本症例は頬脂肪体のヘルニア形成と診断した。

結 語

われわれは、1歳2カ月男児の口腔内刺創による頬脂肪体のヘルニア形成をきたした稀な症例を経験したので報告した。

(尚、本論文の要旨は、昭和54年6月23日、岩手医科大学歯学会第8回例会において発表した。)

Abstract: A rare case of traumatic herniation of buccal fat pad has been reported.

A boy, 1 year 2 months of age, was brought to the emergency room of our hospital. His mother told that the child had fallen while playing with a tooth-brush, and stabbed the tooth-brush tip into his mouth. Examination of the child's face and mouth revealed slight swelling on the right side of the face and a red-brown tumor protruding through the buccal mucosa. The child was excited, uncooperative, and in moderate discomfort.

With the patient under general anesthesia, the fat pad was grasped with forceps and gently pushed through the laceration and into its space. Then the wound was closed with No. 4-0 Dexion sutures.

The postoperative course was unevenful, and there was only moderate swelling in the right cheek. The patient was discharged from the hospital on the ninth day after admission.

Six weeks after discharge from the hospital, examination revealed that all edema had disappeared and the buccal tissues had completely healed.

文 献

1) 上野 正: 小児の口腔外傷(会), 口病誌, 43: 88, 1976.

2) 越前和俊, 及川 桂, 土田秀三, 高橋俊紀, 関重道, 小守林尚之, 関山三郎: 小児の顔面外傷における臨床統計的観察(会), 日口外誌, 24: 1301, 1978.

- 3) Clawson, J.R., Kline, K.K. and Ambrecht, E. C. : Trauma-induced avulsion of the buccal fat pad into the mouth : report of case. *J. Oral Surg.* 26 : 546-547, 1968.
- 4) Brooke, R.I. and MacGregor, A.J. : Traumatic pseudolipoma of the buccal mucosa. *Oral Surg.* 28 : 223-225, 1969.
- 5) Turner, E. (1969). Brooke R.I.⁸⁾より引用.
- 6) Browne, W.G. : Herniation of buccal fat pad. *Oral Surg.* 28 : 181-183, 1970.
- 7) Cavina, R. A. : Herniation of buccal fat pad. *Brit. dent. J.* 132 : 272, 1972.
- 8) Messenger, K. L. and Cloyd, W. : Traumatic herniation of the buccal fat pad. Report of a case. *Oral Surg.* 43 : 41-43, 1977.
- 9) Brooke, R.L. : Traumatic herniation of buccal pad of fat (traumatic pseudolipoma) : a review. *Oral Surg.* 45 : 689-691, 1978.
- 10) 川原秀樹, 竹中将統, 宮城 巧, 亀山忠光, 朱雀直道 : 肉腫を疑わしめた幼児の頬部に発生した脂肪腫の1例(会), 日口外誌24 : 1339, 1978.
- 11) 三科正見, 柴崎上二, 長崎昭夫, 穴戸博之, 高井 宏, 渡辺 治, 斉藤武郎, 河原裕憲 : 幼児の頬粘膜に発生した脂肪腫の一例(会), 第33回日本口腔科学会総会抄録集, 49ページ, 1979.
- 12) MacGregor, A.J. and Dyson, D.P. : Oral lipoma. : A review of the literature and report of twelve new cases. *Oral Surg.* 21 : 770-777, 1966.
- 13) Panders, A.K. and Scherpenisse, L.A. : Oral Lipoma. *Brit. J. oral Surg.* 5 : 33-41, 1967.
- 14) Greer, R.O. and Richardson, J.F. : The nature of lipomas and their significance in the oral cavity : a review and report of cases. *Oral Surg.* 36 : 511-557, 1973.
- 15) Lucas, R.E. : Pathology of tumours of the oral tissues, 3rd ed., Churchill Livingstone, Edinburgh, London and New York, pp 183-186, 1976.
- 16) Hatziotis, J.Ch. : Lipoma of the oral cavity. *Oral Surg.* 31 : 511-524, 1971.
- 17) Vindens, H. : Lipomas of the oral cavity. *Int. J. Oral Surg.* 7 : 162-166, 1978.
- 18) Yoshimura, Y., Miyagi, K., Shoji, M., Matsumura, T. and Kawakatsu, K. : Lipoma in the infant and child : report of cases. *J. Oral Surg.* 30 : 690-693, 1972.
- 19) 元山 徹 : 対側性頬粘膜下脂肪腫の一例, 耳鼻咽喉科臨床, 16 : 509-511, 1941.